

海賊女帝の弟は今日も  
強くて美しい

カボチャ中將

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界一の美女と称される海賊女帝、ボア・ハンコック。

彼女には二人の妹がいるが、実は彼女の知らぬところでもう一人、彼女に匹敵する美貌を持つ一弟がいた。

これは世界一美しい男の娘、ボア・スイレンによるグランド偉大なるドライン航路冒険譚である。

# 目次

第1話 王 | 1

第2話 悪魔の実 | 9



## 第1話 王

ボクの話をするためには、まずは母の話をするのが分かりやすいだろう。

母は強く、美しい人だった。

大の男が何十人で襲おうとも蹴散らし、特別な能力を使える悪魔の実の能力者であろうとも覇氣の力で叩き潰す。

母の出身は男子禁制の女ヶ島、アマゾン・リリー。住人は全て女性でありながら、主な収益を海賊行為で賄っているという美しく強い国。母はそこでも屈指の戦士であつたらしく、偉大なる航路前半の海『楽園』では無敵の強さを誇っていた。

その母は、自身の3人の娘が突如として行方不明となつたことで、それを探すため、故郷であるアマゾン・リリーを去つた。

数多の海を探し回り、時には危険を承知で偉大なる航路後半の海『新世界』にすら足を運んだ。その過程で生まれたのがこのボクで、ボクを連れて母はさらに旅を続けた。

島から島へを転々とし、ボクが6歳になつた頃、母は一枚の手配書を見て泣き崩れた。どうやら娘、ボクからすれば姉達はこういう経緯が無事に母の故郷アマゾン・リリー

へと帰還し、賞金首となつて手配書が出回るほどの実力者として名を馳せていたのだ。  
男であるボクは男子禁制のアマゾン・リリーには入国できないため、母は娘達が無事ならそれで良いと故郷へ帰ることを諦め、ボクらの旅は終わった。

そして一〇一〇年後。

旅での無理が祟つたのか、母は去年死んだが、後悔は無かつたことだろう。何せ一このボクを生み、育てたのだから。至上の幸福を謳歌したに違いない。世界で最も偉大な女としてあの世で鼻高々だろう。

「王よ、お食事の準備が整いました」

恭しく頭を下げる女にボクが頷くと、次々と運ばれてくる料理。それは国一番の料理人が、ボクだけのために、好みや健康、旬や流行を敏感に取り入れた完璧な食事。正に王に相応しい。

そう、母が死んですぐ、ボクは王になった。

偉大なる航路『楽園』にあるこの小国は、潤沢な資源から財政は潤っており、大国もその存在を無視は出来ない程度には力のある国。

ボクはその王族から王位を受け継いだのである。

勿論、快く譲ってくれた。いや、正確には貢いでくれたといふべきか。

当時の女王が、その地位を、財産を、全て無条件でボクに貢いだ。ボクに気に入られるために。

「おう」

「はい、すぐこ」

呼びかけると、ボクの隣に立っていた女——元女王は至福の表情で跪き、口を開けるボクに贅を尽くした食事をせつせと運び始めた。この女にとっては女王の立場よりも、導くべき国民よりも、こうしてボクに食事を運ぶことが最高の幸せなのだ。

口に運ばれた食事を咀嚼しながら、王城の広々とした広間に目を向ける。そこでは国中から集まった美女達が顔を赤くしながらボクを見ていた。使用人のくせに手を止めているとお仕置きものだが、このボクに見惚れてしまうことは仕方がないこと。ただ食事をしているだけで、数億ベリーの絵画よりも眺めるに値するものであることは間違いないのだから。

食事を終えれば王の務めとして政務の時間だ。

と言つても面倒な仕事は全て家臣達にやらせているため、ボクのやることは重要な決定を下すことと、戯れに適当に選んだ民から話を聞いてやるくらいのこと。

まあ、食事休憩の退屈凌ぎには丁度良い。

ボクが話を聞く体勢を取ったのを感じたのか、大臣の役職を与えている男が、懐から書状を取り出して簡潔に読み上げる。基本的に顔の良い女しか家臣にしない方針のため、ボクが王になった時、前女王の抱えていた殆どの家臣をクビにしたが、この男のように秀でて優秀な者は残している。

ボクが好き勝手やるためには、この国の国力を落とすたくはないが面倒な政務はやりたくないのだから、ボクの代わりに適当に仕事をしてくれる人間は必要だ。

「貿易を行っているアラバスタ王国より、食料の輸出货量を増やして欲しいと打診がありました。近年、首都アルバーナ以外では雨が降らなくなる不可解な自然現象の長期的な発生から国内情勢が乱れており、食料に限らず、様々なものを輸入に頼っているようです……」

アラバスタ王国はサンデイ島アイランドにある砂の王国。

世界政府創設に参与した20の王族の一つ『ネフェルタリ家』が治める文明大国。

広大な土地の大半を砂漠が占めているが、人口は1000万人以上と多く、この辺の国では最も力を持つ。

なら、答えは簡単だ。

「輸出と言わずくれてやれ。アラバスタは大国だ、恩を売っておいて損はない」

不可解な自然現象とやらがこれからも続くのなら、支援の必要性は増すばかり。我が



国への依存度を高めるためにも最初はくれてやるくらいで良いだろう。

そうして我が国との取引に集中させ、依存が高まってくれば、こちらも大きく出て要求を通す。これからそのための他国への根回しも同時に行っていけば、未来でアラバスタ王国に多大な影響力を持つことができる。

ボクの指示から意図を読み取ったのであろう大臣が頷いたところで、パンツと慌ただしく立ち上がる音が聞こえた。

音の原因は、こちらを驚愕の表情で見詰めている男。彼は今日のボクの戯れのために適当に招かれた国民であり、王城へ招かれたというのに貧相な格好をした、この裕福な我が国では最底辺の部類の人間であった。

「他国に支援する前に、自国の国民に施しをお願いしたい！明日食うに困っている者も、この国にはまだいる！」

何を言うかと思えば聞くに堪えない戯言であった。周囲の家臣達は一樣に顔を顰めている。それはそうだ、この男は根本的なことを分かっていない。

「馬鹿か？それでボクは何か困るか？ボクはボクが食べる分があれば困らないだろうが」

「……なっ!?!」

「食う金もない民のことなど知ったことか。ボク以外の人間に求められるのは、ボクに

如何に尽くせるかだけだ」

食う金がないということは働く力も、金を生み出す知恵もないということ。そんな国民が必要か？

この国はボクの国。ボクに尽くすための国だ。ボクに貢ぐことは許しているが、ボクから施すことなどあるはずもない。

「そんな、それでは貧乏人は死ぬというのか!？」

必死の表情で叫ぶ男のなんて哀れなことか。ボク以外の男はその辺の石ころ程の価値もないというのに、尽くすことを怠り、剩えこのボクを糾弾するとは。

あまりに哀れで滑稽で、最早怒りもない。ただ王として教えてやらねばなるまい。

「知るか。ボクのせいではどうなろうと……全ては許される。なぜなら……そう、ボクが美しいから!!」

「出たわ!王の見下し過ぎのポーズ!見下し過ぎて、逆に頭を下げているわ!!」

こんな人間、視界に入れる価値もない。

歓声を上げる家臣達とは裏腹に、怒り・驚愕・混乱などで感情が掻き乱されている男の様子を感じ、ボクはそのままの姿勢で家臣に命じる。

「この男にもう用はない。適当に金でも渡してつまみ出せ」

良い遊びを思いついた。

この男が今日与えた金をどれだけの期間で使い切るのか予想するゲームだ。ボクの予想では今夜にでも使い切ると思うのだが、どうなるか。家臣達にも賭けさせればちよつとした余興にもなる。

「王よ、私めは夜まで持たぬと予想しますが」

指示内容からボクが遊ぼうとしていることを悟った大臣がそう告げるのに、ボクは顔を上げてニヤリと笑いかけた。

女に貢がせ王となり、戯れに民で遊び、退屈凌ぎで国を動かす。それでもボクーボア・スイレンは許される。

何故なら…そう、ボクが美しいから！

世界一の美女と称される海賊女帝、ボア・ハンコック。

彼女には二人の妹がいるが、実は彼女の知らぬところでもう一人、彼女に匹敵する美貌を持つ一弟が存在した。

その長い髪は、満点の星が煌めく夜空のように美しい黒から、晴れ渡る快晴の空のように青い空色へとグラデーションの掛かった唯一無二の美しさ。

その瞳は、アメジストすら霞むような高貴な紫色で、比肩するもの無き美しさ。

その尊顔は、どんな芸術家にも表現しようのない、性別という概念を超え、誰もを魅了する絶世の美しさ。

彼こそが、『王下七武海』アマゾン・リリー現皇帝にして、九蛇海賊団船長、世界一の美女、ボア・ハンコックの弟――世界一美しい男の娘、ボア・スイレンである。

## 第2話 悪魔の実

悪魔の実。

海の悪魔の化身だとか言われる不思議な果実で、売れば最低でも1億ベリーの値がつかほどの希少性ではあるが、食べた者はその実の種類によって多様な特殊能力を得ることがができる。

デメリットとして、悪魔の実を口にした者は海に嫌われ、一生カナヅチになり、海に入ると体から力が抜け、能動的に能力を使うことができなくなったり、沈むようになってしまいが、得られる強力な能力を考えれば些細なことではあろう。

こんな話を突然しているのは、このボク、ボア・スイレンもまた悪魔の実の能力者だからである。

世界中から珍しい食材を集めさせた時に、紛れ込んでいた悪魔の実を口にし、能力を得た。あまりの不味さに最初はキレ散らかしたのだが、今はこの能力を気に入っている。

「た、助けてくれ〜！もう海賊は辞める！悪さもしねえ！」

「餌は黙ってろ、魚が逃げるだろうが」

能力者であり、母から戦闘訓練を受け覇気を修得しているボクは、この『偉大なる航路』前半の海、『楽園』では敵なしであった。そのため、暇潰しで国の周囲の海賊を狩ったりしている。

そして、折角捕まえた海賊をそのまま殺してしまうのは勿体ない。賞金首なら海軍に引き渡させて得た賞金を、気まぐれで家臣や兵士に与えたり、武術大会や服飾大会などの余興を開催し、気に入った者に賞金として配ってやっているのだが、そうでもないクズはボクが遊びに使ったりする。

今やっているのはロープで縛った海賊達を大型海王類が出るといふ地域でぶん投げでの釣りだ。ただまあ、実際やってみると動きもあまり無いし飽きてきた。

「なあ、このままこいつを国まで引つ張って、生き残れるか賭けないか」

ボクがそう提案すると、船に乗っていた兵士達が次々と掛け金と予想を出し始めた。拷問する海賊が何時間耐えられるかや、ボクが海賊船の船員を殲滅するまでの時間など、度々賭けをさせているから慣れたものだ。即座に集まった掛け金と、的中した際の金額が計算によって出される。

結果は大きく偏っており、生き残る方に賭けた人間は殆どいなかった。これは、もしもこいつが生き残れば大勝ちだ。

「そんなことされたら死んじまうよ!!」

「だから賭けが面白いんだろ。そうだ、お前も賭けていいぞ、生き残れば大金が手に入って自由になれる」

本来なら死罪でしかない男が自由になれるチャンスを与えて貰っているのだ。慈悲以外の何物でもない。

良い事をして気分が良くなったボクは生き残る方に賭けてやった。

まあ、国に着いてロープの先を確認したら、ロープが何かに食い千切られたように切れていて、男の姿は影も形もなかったわけだけど。



そうして、海賊達を潰して遊んでいると、近隣の国から海賊討伐の協力要請が来た。

近年、ボクの遊びでこの辺の海賊が減っていることは知っているだろうし、海軍よりも確実と考えたのか。

この『偉大なる航路』での海軍の腰の重さは、大海賊時代なんて言われ、海賊が蔓延っていることから分かる通り酷いものだ。国が滅亡するくらいの被害ならともかく、少し困っている程度では迅速な対応は期待できない。

今回要請があつた国とは頻繁に貿易を行つてゐるため、そちらの積荷を奪われたりすれば、回り回つて我が国に影響が及ぶのは必至。

最近何かと話題になつてゐる『スパード海賊団』と交戦し引き分けた程の悪名高い海賊団だというのだから、もしかしたら中々楽しめるかもしれない。この国にはボクと満身に戦えるような人間はいないし、雑魚の海賊相手ばかりで飽き飽きしてゐたところだ。

「久し振りに楽しめそうだ」

ボクが王位を元女王から貢がれた時、当然ながら反対する者も多くいた。それでもボクが王であり続けているのは単に、ボクが強いからだ。

貢がれたとはいえ、正当な手順によつて王となつたボクを引きずり下ろすには、力で制するしかないが、力で敵わぬのなら黙つてボクに従うしかない。

この大海賊時代、力がなければ何も手に入らないし、何も守れやしない。

それに何より、強い者は美しい。

だからこそ、この美しきボクが強いのは必然。

それ故に――

「これならまだ釣りの方が楽しめたな」

――悪名高い海賊だろうとも、このボクには触れることさえ出来ずに地へ伏した。



完全なる勝利、圧倒的格差、何と罪深き美しさだろうか。今日もボクは美しい。

この海賊団の船長であった男の背に座り、ボクはボクの美しさに酔い痴れていた。『楽園』にしては珍しく悪魔の実は能力者が複数人いたが敵ではなかった。

やはり覇気も知らない無知な海賊では最早遊び相手にもなりはしないようだ。

これで面白い能力でも持つていけば楽しめたものだが、全員が超人系バグミシテで、大して能力を使いこなしているわけでも無かったので興ざめだった。

噂に聞く動物へ変身できる能力者、動物系ゾオンを見てみたいのだが、そういるものでもなか。大国アラバスタには『アラバスタ最強の戦士』と誉れ高い鳥になれる者もいるようではあるし、存在していることは間違いないんだけど。

「こ、これが、『触れられざる皇帝』……ッ！最強の海賊団がこんなにあっさりッ」

まだ意識のある海賊がいたのか、顔を真っ青にして全滅した海賊団を見渡していた。『触れられざる皇帝』というのは、この辺の海賊が次々と海賊団を潰して回っているボクのことを恐れ、呼び始めたものだ。このボクを恐れることは正しくはあるが、それを知って尚挑むのは愚かで滑稽だ。

「随分と安い最強だったな、欠伸が出る程退屈で賭けを考える暇もなかったわ」

ボクからすれば雑魚でも、トータルバウンティは一億ベリ一超えということを考える  
と最強と勘違いしてしまう程度には、楽にこの『楽園』を進んできたのかもしれない。た

ぶん、この辺を担当している海兵共では到底捕まえることは出来なかつただろう。

「やはりボクの強さを測るものさしは、『楽園』には中々ない、か」

後この辺でボクと戦えそうなのは、噂からすると『アラバスタ最強の戦士』か『スピード海賊団船長』くらいか。

とはいえ、『スピード海賊団』はもう先の海へ進んだという話も聞くし、アラバスタの重鎮である『アラバスタ最強の戦士』をボコボコにして国家間の不和に繋がるのは面倒だ。

「そうだ、いるじゃないか、大物が」

アラバスタで持て囃されてる英雄にしてー 『王下七武海』の一人、サー・クロコダイルが。

王下七武海は、収穫の何割かを政府に納めることが義務づけられる代わりに、海賊および未開の地に対する海賊行為が特別に許されている、世界政府によって公認された海賊。

いつもの海賊潰しのように勝手に手を出せば、糾弾されるのはボクの方だ。この美しきボクを糾弾するなど万死に値するが、柵しがらみは世を楽しむエッセンス。遊戯ゲームはルールを守るからこそ面白いのだから。

『王下七武海』サー・クロコダイルと戦い、ボクの強さを測る。当面の遊びとしてそれを

目標とすることにしたボクは、早速、兵士達に海賊の連行を命令しつつ、同行していた家臣には書状の作成を命令した。

書状の内容はまあ、視察と言ったところだろうか。

その宛先は、アラバスタ王の住まうアルバーナ宮殿。

まずは敵情視察、サー・クロコダイルを直に見ることから始めよう。